振り向けば未来

－子供たちに伝えたい過去－

２０２６年１月

特定非営利活動法人富山地域循環共生圏研究会副理事長
山崎　正治

私　「今日は、昔話をしてあげよう。桃太郎のお話だ。『むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがすんでいました。おじいさんはまいにちまいにちやまへしばかりに、おばあさんはかわへせんたくにいきました』･･･」

孫　「ねぇおじいちゃん、なんでおじいさんが芝刈り機を持っているの？　なんでおばあさんはわざわざ川まで行って洗濯機を使うの？」

さて、「桃太郎」の話、一体いつの時代の話だろうか？　少なくとも江戸時代より前だと思われる。でも高度成長期までの富山県では、普通に見られた光景だった。そんな数百年にわたり延々と続いてきた暮らしが、高度成長期で一変した。

太平洋戦争で負けた日本人は、それまでの社会秩序をすべて否定し、西欧の個人主義に基づく社会体制を構築し、子供達には戦前の日本をまったく教えなかった。今、戦後 80 年、世代的には三世代が経過し、戦争を経験している世代の孫が親となっている。これから曾孫の世代がやってくる。彼らは、戦前の知識もなく、またそれを知る機会もない。

「あるもので暮らす」「ないものは他所から借りる」「近所で助け合う」「子どもは地域の宝」で暮らしを立ててきた日本人は、今「なければ買う」「買うために稼ぐ」「他人の価値観にかかわらない」「子どもは親の所有物」で完結する暮らしに変わった。

「無限に地球資源が存在する」と信じていた人々は、ようやく地球資源が有限で、人々の贅沢な暮らしが地球をダメにしていることに気づいた。

戦前を生きた人たちは、やがていなくなる。この人たちの考え方、生き方を後世に伝え、これから新しい「なつかしい昔」につなげていくのは、昭和 30 年代、戦前の人たちの教えを理解し、彼らの価値観を実体験として知っている人たちに課された義務なのではないだろうか。

目　次

０　はじめに
（１）２０××年のある日－世紀末＆思い直しシナリオ
（２）なぜこれを書こうと思い立ったのか
（３）これをどのように広め、活用していきたいか

１　貧しかった日本を生きてきた大人の知恵袋
（１）衣
（２）食
（３）住
（４）遊び
（５）地域とのかかわり
（６）大人とのかかわり

２　貧しかった日本のことを聞いて育った大人の役割
（１）戦後を生きてきた大人からのヒアリング
（２）これからの時代を生きなければならない子供たちへの伝承

３　私たちの暮らしの変化

４　過去の知恵に学ぶ－東京を中心とした全国一律の規範からの脱却

５　新たな地域循環共生圏の形成と普及

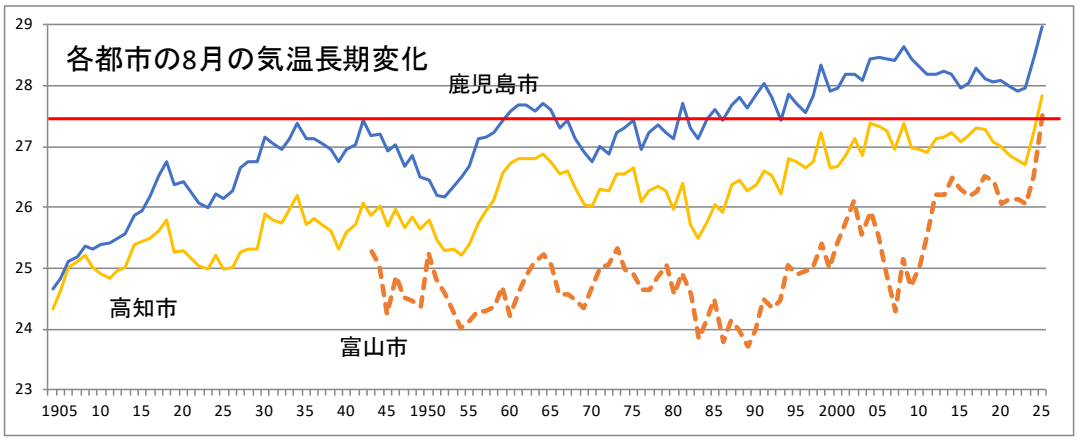
０　はじめに

（１）２０××年のある日－世紀末＆思い直しシナリオ

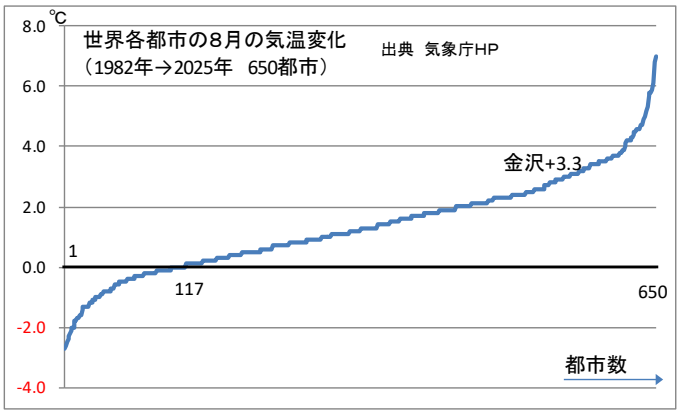
仮説Ａ　世紀末シナリオ

世の中の事象には「閾値」というものが存在する。その値までは特に何も変化はないが、その値を超えると表面化する値。たとえば 200cc のグラスに水を注ぐ。表面張力を入れてある程度まで溜まるとあふれだす。災害で言えば、これ以上雨が降ると堤防が決壊する雨量値。温室効果ガスが閾値を超えるまではあまり大きな変化は現れないが、超えた瞬間表面化する。40℃を超える気温、想像を超える大雨災害。かつては「真夏日」と呼んでいた夏の高温が、ごく普通の気象用語となり、2007 年に「猛暑日」が登場した。当初は稀有な日であったが、2025 年は富山市の猛暑日が 29 日あった。

40℃を超える日の名前も考えられているらしい。やがて 40℃を超える日が常態化し。動物や植物の生態に深刻な事態がやってくる。人間は屋外で活動することが困難で、巨大なドームに包まれた空間で暮らすこととなる。

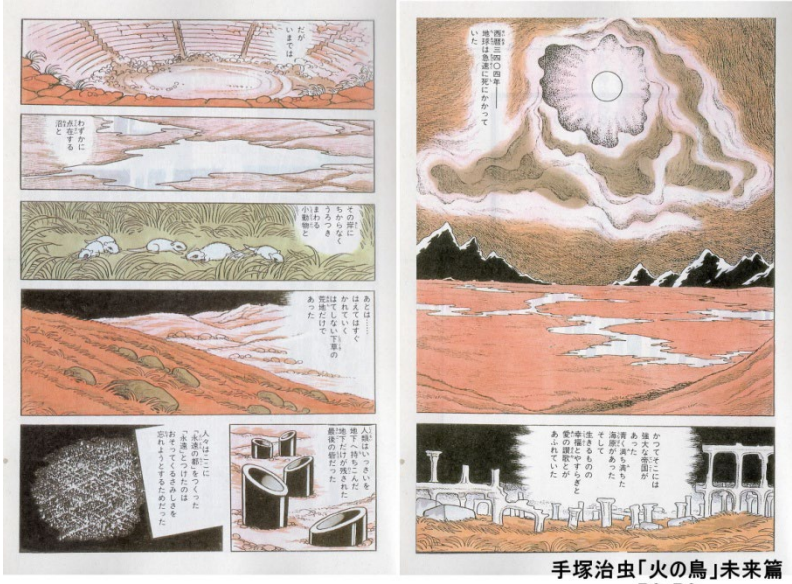


富山市の 2005 年 8 月の気温は、1960 年頃の鹿児島市とほぼ同じ。かつての高知市よりも高い。南洋植物が茂り、カツオや熱帯魚が泳ぐ。



左図は、気象庁が発表している世界各地の 1982 年 8 月と 2025 年 8 月の気温差を並べてグラフにしたものである。500 を超える年で気温が上昇し、6℃以上上昇した都市もある。

漫画家手塚治虫は、「火の鳥」で核戦争により人類がたった一人を除いて滅び、再生を試みるがうまくいかない、結局火の鳥が「人間は宇宙全体のバランスを崩し、その報いを受けるのだ」と伝えている。



手塚治虫「火の鳥」未来篇
P2−P3

仮説Ｂ　思い直しシナリオ

地球温暖化が進み、東京への異常な集中が続き、このまま進めば、自分たちの次の世代が安心して過ごすことができなくなると気づいた大人たちは、過去の地域資源循環を通した持続型社会の価値に戻すことを決めた。「あるもので暮らす」「地域とともに生きる」暮らしを模索し始めた。

日用品、最寄り品は近くの店で買い求める。お店ではご近所さんとの会話がはずむ。子供たちは学校から帰ったら、近所の広場で遊ぶ。夕食と団らんは親子の絆を高めている。都市型プレイパークの「遊ばせてくれる」仕掛けではなく、自分たちが工夫して「みんなで遊ぶ」。高度成長期前の人たちが日常的に体験していた資源循環型、多世代交流型の暮らしが復活している。

（２）なぜこれを書こうと思い立ったのか

人類滅亡の道を歩きたくない、自分たちの次の世代に幸せな未来を与えたい。

高度成長時代、地球資源を無限だと勘違いし、浪費してきたツケが、今、私たちに襲いかかろうとしている。

この環境をこしらえた私たちは、罪を受け、苦しみながら絶えてもよい。しかし、これから地球で生きる私たちの孫の世代、彼らが安心して天寿を全うできるよう努めていくことが、私たちに課せられた使命なのではないだろうか。

昨年（23025 年）昭和になって 100 年となった。太平洋戦争終戦からも 80 年が経った。戦前を語ることができる人はどんどん少なくなる。日本は太平洋戦争での敗戦を機に、社会の仕組みがガラッと変わった。天皇を中心とした「神の国」から西欧の民主主義に倣った国へ。地域で支えながら暮らすことから家族で生きることへ。物不足に耐える時代からモノがあふれる社会へ。「明日は今日と同じ暮らしができればよい」から「明日は今日よりも豊かに暮らしたい」に変わった。過去に戻ることはないが、過去のすべてを否定することもない。有限な地域資源のもと、資源を有効に循環させながら暮らしていくすべを、次の世に残していく努力をしていきたい。

（３）これをどのように広め、活用していきたいか

人々の価値観が多様化し、異なった考え方のそれぞれが尊重されなければならない時代において、ある特定の考え方や手法を広めていくことは難しい。世論にそれを期待するのにも無理がある。必要なことは、愚直に人の心へ訴え、「そうだよね」と思ってくれる人を増やしていくことだ。

この考え方を大人にぶつけたとしても、長年異なった価値観を教えられ実践してきた人たちには難しい。これから大人になる、まっさらな世代にアプローチすることが不可欠だ。

1　貧しかった日本を生きてきた大人の知恵袋

以上述べたように、持続可能型社会の維持には、かつて私たちが暮らしてきた生活を顧み、未来につなげていく要素を導き出し、それを伝えていくことが大事だ。

これからしばらく、高度成長期までの暮らしの中で、持続可能型社会につながる事象を洗い出してみすることとする。

私たちが「普通に」暮らしていた中に、どのようなポイントがあるのだろうか。

（1）衣

お古

昔は兄弟がたくさんいた。兄（姉）が着られなくなった服は、弟（妹）がもらって着る。今で言う「リサイクル」だろうか。これが当たり前。お古を着て学校にも行くし、お出かけもする。

ツギ直し

ころんでズボンに穴が開いたら、親が余り布をあてて縫ってくれた。大抵の子どものズボンにはツギがあたっていたものだ。新品が買えなかったわけでもない。新品のズボンには、ポケットの中にツギ当て用の切れ端が入っていた。「もったいない」と思っていたのだろう。

ハギレ

我が家の商売は、最初「ハギレ屋」から始まった。終戦後、洋服や着物を裁った後に出る余り布が立派な商品として流通していた。大きさもバラバラ、雑多なハギレが店の商品棚に無造作に積み上げられている。これを下からめくりながら気に入ったハギレを探していく。値段は目方。ハカリに乗せて「はい〇〇グラムです」とやっていた。

お針子さん

着物は、今は既製品が多いが、かつては呉服地を呉服屋さんで買い、採寸をして仕立ててもらうのが一般的だった。従って呉服屋さんは何人も内職の「お針子さん」と契約をしていた。生地を「お針子さん」に持っていき、縫いあがった着物を取りに行くのは子どもの仕事。私もよく行かされた。呉服屋さん、お針子さんがかかわることで、付加価値が地域内に落ちる。

短靴

昭和 30 年代、子供たちが遊ぶ時に履くのがゴムの「短靴」。ゴムなので、濡れようが川に入ろうが、水でブカブカになるだけで、そのうち乾く。その前の世代は「裸足」。尖った石や落ちているガラス、釘などで怪我をすることも多く、「短靴」は子どもたちの救世主だった。

（２）食

菜っ葉飯

終戦後、米が手に入らない時、いろんなものを米に混ぜて食べた。大根、大根の葉、芋など。今なら珍しい料理だろうが。当時は米の代用で食べたのだから決して「うまい」ものではなかったようだ。

大和の食堂

昭和 30 年代、外食など贅沢な時代。子供たちの憧れは、大和百貨店 5 階の食堂でお子様ランチを食べることだった。チキンライスを丸く盛った上に日の丸を立てたお子様ランチプレートを食べる姿を想像しながら、ケースの前でじっとサンプルを眺めるのも楽しみだった。

ごっつぉ

普段、とても質素な食生活を送る我が家だが、5 月 1 日の高岡御車山祭で親戚が集まって食べる昼食は、大変豪華なものだった。お頭付きの鯛、カニの酢物、煮〆、トンカツなどは「ごっつぉ」と呼ばれ、子供たちもお相伴にあずかる。蔵から朱塗りの食器を出し、お赤飯と澄まし汁に、前述の料理が並び、御膳の脇には「こぶた」と称する土産物が並んでいる。

へっつい

「へっつい」はカマドを意味する。昔はガスや電気ではなく、薪である。米はお釜で、魚は七輪で調理する。我が家の台所は、二階に上がる階段の隣にあった。私は階段に座り、母が調理をするのを見ていた。ごはんが炊けると、母はいつも塩むすびを握り食べさせてくれた。特におコゲを握ったおむすびは最高にうまかった。

墓場の草

我が家の裏手にある「万現寺」の墓場に生えている草で食べられる草を摘んでよく食べた。「トリカブト」をよく食べたが、それには硝酸が入っていて結石になることを大人になって知った。反対に「ノビル」や「よもぎ」など子供の口に合わない草は敬遠されていた。

（３）住

長屋

今の「アパート」や「マンション」など当時はなく、一軒家か、それをつなげた「長屋」が住まいだった。毎月大家さんに「家賃」を現金で持参する。

借主同士の交流も盛んで、隣の家に御呼ばれに行く、酒を飲みに行く、将棋を打ちに行くなど、親しく交流していたものだ。

炬燵の間

昔、テレビが各家一台時代、テレビは居間にあった。冬は家唯一の暖房器具「練炭炬燵」がやは

りテレビの間にあった。家族全員が炬燵に入りテレビを見たものだ。チャンネル権は当然大人。だから番組も夕方から夕食の間は子供向け（チロリン村とクルミの木、ケペル先生こんばんは、バス通り裏など）それ以降は大人向けの番組だった。

歯磨き粉

今、歯磨きに使うのは、チューブに入った練り歯磨きだが、昭和 30 年度代までは粉歯磨き粉が一般的だった。朝起きたら、蓋つきの円筒に入った歯磨き粉の容器をひっくり返し元に戻すと、一回分の歯磨き粉が容器の上に溜まっているので、それを歯ブラシにつけて磨く。容器は家族で共有するので、今考えると不衛生極まる。

座敷と仏間

「

ポツンと一軒家」で、空き家なのに解体しないのは、括り付けの仏壇や神棚を処分できないからというのが多い。また、家にはお客様を招き入れるための、ちょっと豪華な部屋「座敷」があった。子供たちは普段は座敷に入ることができない。お祭りや大切な客が来て「ごっつぉ」を食べるときにだけ入ることができるため、座敷には格別の思いがある。「ハレ」と「ケ」の「ハレ」である。

ゴミ箱

昔、家のゴミ箱は木製だった。朝、ゴミ回収トラックが町内を回り、家の前に出してあるゴミ箱をトラックの荷台に上げ中のゴミを捨てる。時々中身がこぼれるので、それは各家が掃除しなければいけない。それを怠ると町内会長から叱られる。

（４）遊び

石と木のおにかい

石と木の上しか歩けないオニゴッコ。土の地面に降りると負け。裏のお寺の墓場は絶好の場所。墓石にしがみついて墓から墓を移動。時々、子供がしがみついた墓石が動いて一緒に落ちることがある。その都度「危ない」と禁止されるが、やがて復活する。いかに他の子どもが飛べない墓を飛ぶか。これを競う遊びでもある。

釘差し

寺の前の空き地で、釘を握った手を頭の上から振り下ろして地面に釘を刺す。釘が刺さらないで倒れると次に交代。２回釘を刺し、３回目に自分の領地へ戻れば領地が増える。こうやって領地の大きさを競う。相手が出られないよう相手の領地を塞ぐと有利になる。

つまんこ屋

昭和 30 年代前半まで、世の中にはスーパーがなかった。子供たちは、一日のお小遣い 10 円を持って近くの駄菓子屋さんに行く。楽しみはお菓子の「当てくじ」。高岡では「つまんこ」と呼んでいた。ハズレは「スカ」。普通はこれ。「つまんこ屋」は子供たちの集会場所でもあった。

昼か夜か行燈か

町内のあそび場は、わが家裏手のお寺。本堂の周りには板を並べた幅 1m ほどの廊下があり、そこでやったのがこの遊び。オニは後ろ向きで廊下をしゃがんで歩き、あとの人はオニに触られないようすばやくオニの前に逃げる。本堂の柱や板戸にしがみつくものもいる。

その時、オニが「昼」と叫べば、逃げる子供は「ワイワイ」とうるさくしゃべる。「夜」と言えば静かにする。「行燈」と叫んだらそこから動いてはいけない。

はいのこ

我々のあそびは、大体小学生程度にならないとうまくできない。でも小さい子もうまくなりたい。そこで小さい子の特別ルールが「はいのこ」。遊びには参加するが正式参加ではなく、つかまってもオニにならなくてよい。こうやって遊びのルールを覚え、仲間に加わっていくのだ。

手幅

地面に大きな四角を書き。四隅のいずれかに親指を中心として円を描く。その範囲が自分の陣地。おはじきを人差し指か中指ではじき、3 回目で自分の陣地に戻れば成功。おはじきの軌跡が新たに自分の陣地となる。一定回数でどれだけ多くの陣地を作るかが勝負。

相手の陣地の外側を囲むように自分の陣地を獲得し、相手が戻りにくくする高等テクニックもある。

石ケンケン

お寺の御堂入り口の舗装された部分にチョークや瓦の欠け端で 5m×2m ほどの四角を書き、それを２列×5 行 10 個のマス目にくぎる。10 マスの右端から自分の石（通常は瓦の四角いかけら）をケンケンしながら靴のつま先で蹴る。次のマスに石が入れば成功。それを 5 回繰り返し、左上のマスにたどり着けば休憩。今度はそこから石を蹴り左側の４つのマスに入れる。そこからスタート地点に戻る。４つのマスにはそれぞれ戻り方がある。「ケンケン」は片足飛びで戻る。「はさみ」は両

方の足首で石をはさみ、両足で跳びながら戻る。「天国」は普通に歩いて戻る。最悪は「地獄」。目をつぶって戻らなければならない。危ないので、周りの仲間は「右」「左」「あと一歩」など教えてくれる。成功すれば、次はマス目の 2 番目から開始。そうやって早く左上の休憩場所までたどり着けば勝ち。

カッチン玉

「ビー玉」遊びである。空き地の土に三角形を描き、中に各自が持っているビー玉を供出する。一定の距離に線を引き、そこから三角の中のビー玉に自分のビー玉「テンシ」を当て、中のビー玉を外にはじき出す。はじき出されたビー玉はもらえる。

他の「テンシ」に当てれば当てられた人は一回休み。投げた「テンシ」が三角形の中から出ないと「ドボン」となり次に交代。

行軍将棋

赤と黄色の将棋駒で戦う。最初にすべての駒を裏返して自軍のマスに並べていく。コマは１マスずつ進む。相手の駒に重なったら、審判が両方を比べて勝ち負けを判定。勝ったら相手の駒を分捕ることができる。早く相手の司令部に到達した方が勝ち。将棋と似ているが、駒は裏返し、取った駒は使えないところが違う。また３人いないとできないのが難点。なお、飛行機は自由に飛べる、工兵は空いているマスまで直進できる。

木登り

寺の墓場に大きな葉っぱの大木があった。枝ぶりから最高の「木登り」木だった。どこまで高く登れるか、どこまで細い枝に摑まることができるか、どれだけ早く登れるかなど、技術と度胸を試す機会だった。不思議と落ちることはなかった。もっとも落ちるとすごく危険だからね。

二上山登山

昭和 30 年代、高岡の郊外にそびえる二上山は、格好のハイキング場だった。家から登山口まで自転車で 30 分ほど。そこから 2 時間ほどかけて山頂「奥の御前」に到着。でも当時は弁当を作っ

てもらえない。「どの植物が食べられるか」を知っていて、それを摘んで食べた。「どれが食べられるか」は先輩から教わった。

（５）地域とのかかわり

町内海水浴

私が生まれ育った高岡市元町（現本町）は 40 軒ほどの小さな町内だった。私が一年で最も楽しみにしていたのが、夏休みに町内で雨晴海岸の海の家に出かける「町内海水浴」。貸し切りバスを仕立て、老若男女が集って行く。子供は海で泳ぎ、大人たちは海の家でビールを飲む。当時としては最高の贅沢だったのではないか。

ラジオ体操

夏休みが近づくと、学校から「ラジオ体操カード」が配られる。葉書大のカードに開けられた穴に紐を通して首から下げ、毎朝年長さんの「はんこ係」にはんこを押してもらう。６時半になると小学校の運動場に行き、校下全員でＮＨＫラジオから流れる音楽に合わせ体操をするのだ。

当時の子供は全員「ラジオ体操の歌」と第一第二体操を諳んじていた。夏休みの最後、出席率の高かった子供には、文具やお菓子などのご褒美が出され、それを目指して毎朝出かけたものだ。

呼び出し電話

昭和 20～30 年代、町内で電話を引いている家は 5～6 軒だったと思う。我が家は、衣料品店（ハギレ屋）を営んでいたため電話を引くことができた。戦前も我が家に電話はあったが、終戦時、持っていいた土地は農地解放で小作人に戻し、母は電話債券を売って商売を始めたらしい。

電話のある家が少ない時代、電話のない隣近所さんが我が家の電話を借りて電話をしていた。当時公衆電話などはない。反対に我が家にご近所への電話がかかってくることもあった。その時は、その家まで行って「電話かかっていますよ」と呼びにいかなければならない。その役目は主に子供が担っていた。

夕涼み

昔、家にクーラーなどない。暑い夏、夕方になると、我が家の店の前に椅子を出し「夕涼み会」が始まった。涼んでいるとご近所さんが通り過ぎる。その際、皆さん「おしまい！」と声をかける。「おしまい」は「お閉まい」、本日の活動は終わり「お疲れ様」という意味だったと思う。当時子供の私は「おしまい」を「お休み」と同義語だと思っていた。今ならばビールでも持ち込んで宴会になると思うが、貧乏な当時は素面だった。でも町内にとって貴重な交流機会だったことだろう。

まっつり

毎年 5 月 1 日は高岡御車山祭りが開かれる。旧高岡町 7 つ町が保管する御車山が練り歩くのもので、国の重要有形・無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産に登録されている。子供たちにとって

は、それも楽しいが、それよりも高岡関野神社境内で行われる縁日が楽しみだ。「パチンコ」「スマートボール」「射的」「輪投げ」といった競技、「サーカス」「お化け屋敷」などの興行、そして「あんばやし」「お好み焼き」などの食べ物屋台だ。親から特別に小遣いをもらい、いそいそと仲間内ででかける。

「絶対に勝てない」「不衛生な環境で作っている」など学校や親は行かないように指導するのだが、子供たちは無視。親戚が集まっての夜の宴会「ごっつぉ」を楽しみに、遊び呆けるのである。

（６）大人とのかかわり

うるさじいさん

昔、町内には必ず、口うるさく子供を叱る年寄りがいたものだ。特に銭湯には必ずいた。「体を洗ってから湯船に入れ」「湯船に飛び込むな・潜るな」「せっけんの使い方が違う！」など細かく叱る。子供も「またあの年寄りか」と一応おとなしく聞く。しかし、今思うと、そうやって世間の仕組みを教えてもらっていたような気がする。今だと「パワハラ」で親が訴えるのだろうけど。

年長さんとヒエラルキー

お寺の境内で遊ぶ子供たちにとって、年長の指示には絶対従わないといけない。遊びのルールも年長が決める。年少の子は「早く年長になってルールを決めて遊びたい」と思う。かつてはそうやって自然とヒエラルキーができあがっていた。でも年長になると、いかに平等に納得できるルールを作るかが大切で難しいかよくわかるのだ。

おんぞはんまっつり

町内には、お地蔵さまを祀る祠があった。いつもは無関心だが。お盆になると、祠に電気をともし、お供え物をして「地蔵盆」が執り行われる。この時、集まった子供たちに供されるのが「スイカ」。普段は夜の外出が許されない子供たちも、子供たちだけが地蔵盆を楽しむ。この日の昼間、子供たちは胸の前に賽銭入れを掲げ、町内の各家を周り「おんぞはんのろうとくだいくだはれ！」と寄付を募る。そして集まった寄付金を近所の駄菓子屋さんに持っていき、夜のお菓子を買うのだった。

柿・いちじく泥棒

昔、比較的大きな家には、家の奥に広い庭があった。そして庭には、柿やいちじく、びわなど実をつける木が植わっていた。季節になると実が熟して食べごろとなる。その実を、竹でこしらえた棒で枝ごとむしり、皆でいただく。いわゆる「柿泥棒」だ。当然犯罪だが、これがやめられない。見つかると「こらぁ！」と大きな声で怒られる。けどそれでおわり。学校や親、まして警察に連絡されることはない。というか連絡されるような家の木の実は盗まないのだ。我が家には、柿の木もいちじくの木もびわの木もあったのだが、それには目もくれず、ひたすら他人の庭を狙う。あとで聞いたことだが、そういう家の家主は、そうやって泥棒していきやすいよう、わざと木の実を残していたらしい。「おう、〇〇さんとこの××ちゃん、元気に来とるなぁ」と楽しんでいたのだ。おおらかな時代だった。

（７）家督制度

今、自分の子どもに「お前は長男なのだから、家の仕事を継いでくれ」と言えば、それはパワハラとなる。職業選択の自由は憲法で保障されている。

でも、高度成長期までの日本では、長男が家の仕事を継ぐのは暗黙の了解事項であった。勉強が好きでも、野球がうまくても、「こんなことは商売にはいらない」と言われれば、商業学校に進学し、家の跡継ぎとなったものだ。

また、長男は兄弟の世話も仕事としてやらなければならない。今のように兄弟が少なければよいが、昔は兄弟が多かった。姉がいたとしても家を継ぐのは長男である。旧憲法の下で制度化されていた「長男家督制度」は日本国憲法では廃止されたが、世の中ではまだまだ改められることはなかった。

２　貧しかった日本のことを聞いて育った大人の役割

（１）戦後を生きてきた大人からのヒアリング

・山崎　　健　20250708　山崎家座敷
　　20251017　山崎家座敷
・酒井　真照　20250916　南砺市皆葎「よしのや」
・西　　敬一　20250916　南砺市皆葎「よしのや」
・北　　博道　20250916　南砺市菅沼「掌」
・岩崎　喜平　20250916　南砺市上梨「喜平商店」

（２）これからの時代を生きなければならない子供たちへの伝承

「お金を出せば欲しいものは買える」「世の中は、欲しくもないもので溢れている」町にはあらゆるものがある。モノでもコトでも。自分がやりたくないことを代行してやってくれるサービスがある。自分の代わりに謝罪してくれるサービスがあるそうだ。結婚式の参加者を集めてくれるサービスなど、どうかと思うものもあるが、例えば、小学校の放課後教室、専業主婦のための預かり保育、スーパーに並ぶ調理済み食品、人間の進歩は「楽をしたい」欲求充足に支えられているようだ。

しかし、日本の人口が減り、対人サービスに割ける人的資源量が減少していくこれからの時代、過去のサービスを誰がどうやって担うのか。それは地域で。地域全体で担っていくことになるのではないか。そうなった時、懐かしい過去を記憶している世代の知恵が行かされる。そのためにも、私たちが生存している間に、きちんと継承していけるシステムを作っておく必要があるだろう。

３　私たちの暮らしの変化

（１）　衣

少し前、中国からの観光客を見ると、一目で日本人ではないと気が付いた。それは、彼らの着ている服が、明らかに日本人とは違っていたからだ。日本人は、体にフィットした化学繊維のカラフルな服を着ているのに対し、彼らは綿のずん胴なシャツなどを着ていた。履いている靴も明らかに日本人とは違っていた。今は、すれ違っても中国の方とはわからない。言葉を聞いて初めてわかる。これと同じことが高度成長期までの日本では見られたはずだ。「お古」「つぎ当て」「短靴」前に記述した衣類が当たり前だった。

（２） 食

「日本食」が世界的に注目されている。最初は外国で人気が広がり、やがて日本人も日本食を大切に思うようになっている。高度成長期まで、日本人の食は日本食（和食）だった。ハンバーグやオムレツなど子供たちに人気の今は身近な料理も、かつては「ごっつぉ」だった。ましてや「ステーキ」「フランス料理」など、普通の市民には縁遠いものだった。「体脂肪」「低カロリー」な日本食は、ヘルシーな料理として飽食に慣れ切った人々に有難がられているだが、昔の日本人にとっては日常の食事だった。食材に含まれる栄養成分を気にすることなどなく、出された料理を何の違和感もなく口にしていた。それに有機水銀、カドミウムが含まれていたとしても。

今の食料は極めて資源多消費型である。季節に関係なく手に入る野菜や果物。養殖の魚、飼育された牛や豚, 鳥など、自然に任せるのではなく自然に逆らって手に入れる。これらを育成するのにどれだけの自然資源を無駄にしているのだろう。

食材、残飯の廃棄も大きな環境への負荷となる。残飯となった食材を育てるために必要な資源、廃棄に必要なエネルギーなど無駄の上塗りである。

（３） 住

日本の住宅は木造が主体であった。木を植え、伐採し、建築材として利用する。伐採した森には再び植林する。これらの資源活用サイクルにより、日本の美しい森は維持されてきた。木材で構成された家は風通しがよい。湿度の高い日本では、喚起による湿度管理は必須だ。

冬場は、森で伐採された木の枝を燃料として燃やし暖をとる。家族は居間に集まり、全員で温まる。

今の家は断熱工法を採用している。人工冷暖房を基本とし、電気、ガス、化石燃料で対応する。

こうやって資源節約型生活を送れば、ヒートアイランド現象なども起こらず、二酸化炭素による地球温暖化も防ぐことができる。

（４） 冠婚葬祭

葬式を執り行うのは「親族に別れとあきらめがつくまでの時間的猶予を与えるため」「悲しみを紛らわすため忙しい時間を設定するため」だと聞いたことがある。昔は、結婚式や葬式は自宅で執り行うのが普通で、町内会の役員などが集まり、さまざまな準備を取り仕切ってくれた。そして近所で同様の事態が発生した場合、以前に受け取った世話に報いるため、手伝いに出かける。そうやって地域が回っていた。地区の祭りも各家に割り当てがあり、それに基づいて祭りの準備、実施、片付けが行われていった。そしてそれらの行司が終わった後に開かれる「あとふき」と呼ばれる宴会を楽しみにしていたのである。

４　過去の知恵に学ぶ－東京を中心とした全国一律の規範からの脱却

（１） 生活様式

「日ごろの運動不足を解消するため、車を運転してトレーニングジムに通う」人がいる。「有名店のスイーツが食べたいので、今日の食事は抜いてダイエットする」人がいる。「実家の祭りに行ってもらったお餅をご近所に配りたいけど、付き合いもないので迷惑かなと思いゴミ箱に捨てる」人がいる。「ママ友」「公園デビュー」、涙ぐましい努力をしてご近所付き合いを続けている人がいる。

お正月、ひな祭り、端午の節句、お盆、日本の伝統的催事が都会では消えようとしている。「出しても片付けるのが面倒だし、第一飾る場所がない」。祭りや伝統行事などは、確かになくてもよい。それで生活に支障が生ずることもない。

葬式、結婚式は、従来家庭にとって重大な出来事だったはずだが、家族葬、身内たけの婚礼など、家庭単位で完結することが増えてきた。生活様式のすべてが、地域とのかかわりあいから、家庭内のものとなっている。

その結果、家庭だけで完結できないことを代行する商売も出てきた。団地内、町内に住んでいても。あくまで家族が単位だ。

これらの現象は、昔は東京など狭い居宅に住み、ご近所と疎遠な若者世帯の多い地域特有の現象だった。だが、マスコミの発達による情報の流通、家庭を中心に置いた学校教育、都市と地方の人的交流の増加により、やがて地方にも広がっていった。

（２） 産業

製造業には「重厚長大型」と「軽薄短小型」がある。社会科の授業でそう教わった。重厚長大の代表として八幡製鉄、軽薄短小の代表としてソニーが登場する。

高い煙突からモクモクと煙が出ている写真は、日本の高度成長を支える種として誇らしげに書かれている。

しかし、昭和 40 年代後半になり、大気汚染、河川環境汚染などによる公害病が日本の産業構造を一変させた。発展途上国における安価な基礎素材の優位性により、価格競争でも日本は太刀打ちできなかった。

この結果、私たちが日常生活に必要な品物のある程度を、海外からの輸入に頼るという現状になった。衣類では、ディスカウントストアで購入できる衣類のほとんどは海外生産、日々の食材も米以外はその多くが輸入品だ。木造家屋の柱も海外産だ。品物だけではない。東京の居酒屋では、日本人の店員を探すのに苦労する。外国との交流が途絶えた時、私たちの生活に困難が生ずることは、米不足、中国からの旅行自粛の例でも明らかだ。

これから日本人の労働力は確実に減少していく。高齢者の増加による介護人材の不足も喫緊の課題だ。

（３） 地域とのかかわり

「隣は何をする人ぞ」「東京砂漠」という言葉が昔流行ったことがある。地域の中で、周りに住む人たちと一緒になって暮らしを支えていく。高度成長期までの貧しかった日本では、こうしないと暮らしていけなかった。それが高度成長期になり、人々の所得が向上し、物が豊かに流通し、かゆいところに手が届くサービスが暮らしを変えた。お隣さん、親、祖父母に頼っていた日常の暮らし、子育てなどの負担を代替してくれるようになった。自分たちだけで暮らしが維持できるようになると、これまでそのために我慢していた地域とのかかわりが、次第にうっとおしいものとなり、家庭は地域から独立した存在となった。

この傾向は、最初大都市部で、やがて地方都市部で、そして地方に広がっていった。今や地方でも町内会が存続の危機に立たされている。かつての町内や集落あげての運動会や旅行が消えた。かつて「しばらく旅行で留守にしますので」と近所に声をかけ、近所はそっとその家を見守っていた。「実家の祭りに行ったらもらったので」とカマボコや酒やお菓子をご近所に配り不在中の見守りについて感謝する。

今は、家に警備会社の防犯システムを入れ、しっかりと二重三重に鍵をかけ、家の周りをビデオで撮影する。そのために家計には多大なコストがかかる。

５　新たな地域循環共生圏の形成と普及

人の暮らしは「足し算」を求める。今あるものに次々と新しいものを加えて豊かな生活にしたい。日本の国歌に「さざれ石の巌となりて苔のむすまで」とある。川の小石が転がって大きくなり、岩となるのだ。ありえないことだが、私たちは、飽きる事のない欲望を満たすため、営々と規模を拡大し続けてきた。岩も、水の流れが穏やかとなり、あまりに大きくなると動きを止める。地域資源の限界が見え。次の世代にた引き継ぐためには、新たな価値観による暮らしが必要だ。

（１）「あるもの」で暮らす

「ないものは買えばいいじゃないか」の暮らしに慣れ切った私たちは、持続可能型社会の創出に向け、考えを改める必要がある。昔「ブッシュマン」という映画があった。草原で暮らす「ニカウさん」が文明の真ん中に現れ、騒動を起こすというものだ。当時は面白おかしく見ていたが、今になれば、大きな暗示を与えていたように感じる。「なぜ、そんなものがいるのか？」素朴な疑問から現代人の生活を見つめなおす必要があるだろう。

（２）「ないもの」は借りる

東京などでは、自家用車の維持にかかる費用が高いため、必要な時にレンタカーを借りることやカーシェアが受け入れられているらしい。地方では「車がないと生活できない」と一家に一台、今は一人一台車を所有している。でも徒歩圏内にあった八百屋や魚屋など食料品店を使わず、わざわざ車を使って郊外のショッピングセンターで買い物をする必要があるのか。バスや鉄道など地方交通を廃止に追い込んだのは誰なのか。車のない時代、私たちはバス時刻に合わせてバス停まで歩き、バスに揺られて「お出かけ」していたはずだ。

（３）「余るもの」はあげる

一時期、富山県内の結婚式場近くのゴミ箱には。引き出物の籠が捨てられていた。昔はご近所に「おすそ分け」として配り、いただいた家はそれをおいしくいただいていたのだが、今はそのようなお付き合いをしているご近所もなく、核家族のため大量にもらったものを食べつくすこともできない。そこで、今の結婚式では、昔のような豪華なカマボコやお菓子は出さなくなったらしい。

この「おすそ分け」文化の衰退は、いつしかご近所との人的つながりの疎遠につながり、やがて孤独死、村八分などの弊害をもたらすこととなった。

（４）子供たち、孫たちの世代に残す富山、日本、地球の姿とそれに必要なこと

この間押入を整理したら、我が家にはパソコンが 7 台あった。Windows95・Me・10・11、デスクトップ、ノートなど。でも通常使っているのはノート一台だけだ。ストーブは電気、灯油、ガス含め 7 台、エアコンは 2 台ある。レコード～カセットテープ～CD～MD～MO～DVD～USB～NET とメディアも変化し、その度に対応する機器を買い、そのうち押し入れや納戸に眠ることとなっている。

「ものがたくさんある」ことが幸せだった時代はいつまでも続かない。地球資源が無限であると

過信し、有限な資源を無駄遣いして発展してきた私たちの世代のシステムは、やがて崩壊する。その時、手塚治虫の「火の鳥」のような未来を選ぶのか、それともあらーらたな価値観に基づいて暮らす世代を育て上げていくのか、最後の高度成長を経験した罪深い私たちにできること、それを考えていく必要がある。過去を取り戻すことはできない。でも、未来の世代が同じ過ちを犯さぬよう、私たちがいかに間違えたかを伝えていくことはできる。

間違えた私たち、立ち上がろう。未来の大人たちに向けて、自分たちの過ち、伝えてこなかった親や差父母の知恵を、元気なうちに伝えていかなければいけない。それが私たちに課された役割でと思う。私たちは、それができる最後の世代だ。